

田岡俊次の 国際情勢の 行間を抉る (終)



トランプ大統領来日と 「圧力強化」の危うさ

「あらゆる手段を通じて北朝鮮に対する圧力を最大限まで高めて行くことで完全に一致しました」

11月6日、トランプ米大統領との会談後の記者会見で安倍首相はこう述べた。経済制裁で北朝鮮に核と弾道ミサイルの放棄を迫っても効果がないことはほぼ確実で、米国は西太平洋に空母3隻を展開、ステルス戦闘機F35Aを嘉手納に配備するなど、軍事的圧力を強化している。だが北朝鮮がそれに屈して、自ら対話を求めて来る可能性も低い。威嚇にはそれに相手が応じなければ、さらにエスカレートするしかない、という問題があり、相手もそれに反応して戦争に至る危険をはらんでいる。もし戦争になれば、滅亡が迫る北朝鮮は自暴自棄の心境から、核ミサイルを発射する公算は高く、韓国、日本に甚大な被害、恐らく数百万人の死傷者が生じることになる。安全保障担当の米大統領補佐官H・マクマスター陸軍中將は「被害について共通の理解を得る必要がある」と発言しているが、今回の日米首脳会談でそれが論じられたか否かは明らかではない。戦争

となれば致命的打撃を受ける韓国の文在寅(ムン・ジェイン)大統領は米国の武力行使に絶対反対の姿勢を示し、安倍首相の「(米国と)100%共にある」との言明とは対称的だ。米国も日本、北朝鮮、韓国、周辺諸国のいずれもが戦争を望んでいないのは明らかだが、今回のトランプ氏との会談で、安倍首相はトランプ大統領の「チキンゲーム」の車の助手席に乗って激励し、戦争に一步近づける形となった。「人類史上最大の危機」と言われた1962年の「キューバ・ミサイル危機」に似た様相を示しつつある今回の危機を避けることはできるのか。(聞き手/本誌編集長・和泉貴志)

「対話は無駄」発言で批判され安倍氏に電話で相談

Q…今回のトランプ大統領と令嬢イヴァンカさんの訪日で、日本は最大限のおもてなしをして親密ぶりを示し、北朝鮮問題での見解も完全に一致したから「これで一安心」との感を語る人もいるがどうでしょうかね。

田岡…トランプ氏にとってはこの上



キューバ危機の最中、ソ連船を威嚇する米軍機

なく心地よい3日間だったでしょう。西欧諸国では地球温暖化防止の「パリ協定」からの米国の離脱や、イラン核合意（原子力の平和利用を認め、核兵器開発につながる活動を制限）をトランプ氏が非難していることなどから、関係は悪化しています。ロンドン市長のS・カーン氏（パキスタン系イスラム教徒）を批判したこともあって、トランプ氏の訪英には約200万人の反対署名が集まり、第1の同盟国・英国に行けない。女王が見られるか否か、の論も出ました。韓国は米国の武力行使を警戒し、中国、ロシアも「対話で解決すべし」とトランプ氏の「対話よ

り圧力」に反対する。米国内政権内でも、R・ティラーソン国務長官、J・マティス国防長官（退役海兵大将）らが、「外交的解決」を唱えるし、上院外交委員会のR・コーカー委員長と罵倒合戦をするなど、与党の共和党主流派とも険悪な関係です。内外で四面楚歌の中、安倍氏だけは「完全に一致」してくれただから、蜜月関係になって当然です。ティラーソン国務長官が訪中し、北朝鮮との対話の糸口を求めようとしたのに対し、「小さなロケットマンと対話しようとするのは時間の無駄だ」とツイッターで批判、これが問題になった際には安倍氏に電話して「レックス（ティラーソン）の発言をどう思う」と助言を求め、安倍氏が「今は対話より圧力が大切」と応じた、と言われています。トランプ氏は「戦争になれば大勢が死ぬが、こつち（米国）ではなく、あつち（韓国、日本）の方で死ぬ」と言ったほどの米国第一主義者だが、日本で欲待たれて親近感を抱けば、北朝鮮を倒すために日本を犠牲にしても構わない、という心情は薄れるか、と期待します。厚遇することに損はない。ただ戦争にならない

よう強く求めることは必要です。それをどこまで言い、どんな反応を得たのかは2人だけの会談もあったから分かりませんがね。

核戦争寸前の「キューバ危機」は米ソの密約で解決

Q…本誌11月号では経済制裁が北朝鮮に効かない理由、10月号ではもし核使用に至った際の日本の被害について詳しく伺った。今回トランプ、安倍両氏は「最大限の圧力」を加えることで合意し、チキンゲームのアクセルを一杯に踏み込んだ形です。米国とソ連が全面核戦争の寸前になった「キューバ危機」に似て来たと思えますが。

田岡…全く同感です。中央公論新社が2015年に刊行した『キューバ危機』を再読し、当時のR・マクナマラ国防長官がボトマック川越しの美しい夕陽を見て「生きてもう一度このような夕陽を眺めることはあるだろうか」というくだりに、身につまされる思いでした。

米国のJ・ケネディ政権はキューバのF・カストロ政権を倒そうとキューバ人亡命者1700人をCIAが組織し、1961年4月15日ビッグ

ス湾に送り込んだが、上陸した1200人中、死者500人、捕虜700人を出して全滅、大恥をかいだ。その後キューバに経済制裁、外交圧力を強化したがほとんど効果はなかったため、米軍が加わる大侵攻作戦を計画した。

キューバはますますソ連に頼り、当時弾道ミサイルの配備で実際には米国より遅れていたソ連のN・フルシチョフ首相はこれを好機とし、キューバに中距離弾道ミサイル「SS4」などを配備、米本土を狙う構えを示して均衡を取ろうとした。1962年10月15日にU2偵察機がキューバに陸揚げされたソ連の弾道ミサイルの写真を撮影、米空軍は爆撃を主張したが、ケネディ大統領は海上封鎖でそれ以上の搬入を阻止することを決意しました。

183隻もの軍艦をキューバ東方900kmの海上に展開し、ソ連の貨物船を臨検し、追い出す計画だが、これはソ連との戦争になる可能性があったから、日本を含む世界各地の米軍は臨戦態勢に入り、B52戦略爆撃機は水爆を搭載してソ連領空近くで旋回待機、弾道ミサイル「ポラリス」搭載の原子力潜水艦や、



ケネディ（右）、フルシチョフ両氏は密約を交わしていた

命じた。だが、乗っていた潜水艦隊参謀が「様子を見よう」と説得し、世界は危機一髪のところ、核戦争を免れたことが、ソ連崩壊後に明らかになりました。

この間、米ソ間ではいくつもの経路で裏交渉が続き、ケネディ大統領の弟、R・ケネディ司法長官と、ソ連のA・ドブリニン駐米大使との秘密の接触が特に有効で、米国がトルコに配備していた中距離弾道ミサイル「ジュピター」を撤去することと交換に、ソ連はキューバへの弾道ミサイル配備をやめることで話し合いがつき、ソ連貨物船団は反転、揚陸済みの物も間もなく撤去されて危機は去りました。

すでにトルコに配備されていた米国の「ジュピター」と、これからキューバに配備される「SS4」などを撤去するこの取り引きは、ソ連にかなり有利だったから、米国内や海外で、米国がソ連の脅しに屈したように言われかねない。このため米国側は「この約束は文書にせず、もしそれが洩れれば反古にする」とソ連に言い、何度も噂が出た密約の存在を否定し続けたが、「ジュピター」の撤去は約束どおりに実施された。

この密約があったことを当時の米側関係者達が明らかにしたのは1988年になってのことでした。

ただし、1962年当時に米国は弾道ミサイル「ポラリス」を搭載する原潜の配備を進め、すでに9隻が就役して、「ジュピター」は無用となっていたから、巧みな取り引きをしたとも言えます。こうした裏での交渉と駆け引きは、ケネディとフルシチョフという2人の大物同士だからできたことで、トランプと金正恩の間で同じことが可能か否かは疑問です。だが米国内ではこの取り引きの件はほとんど知られず、「ケネディの決然たる姿勢にフルシチョフが屈し、キューバからミサイルを撤去した」と今も言われます。トランプ氏もその俗説を信じ、圧力に相手が屈し、ケネディ並みの名声を得ることを期待しているのでしょう。

「モニカ事件」審議中にイラク攻撃をしたクリントン氏

Q…北朝鮮が昨年2回の核実験と23発ミサイル発射で費やした額は、8月30日の河野外相の国会答弁では「韓国外交省との意見交換では200億円以上」とされ、北朝鮮



イラク攻撃を強行したクリントン氏

のGDPの0・6%、経済制裁で資金源を断たれてもその程度の額は捻出するだろう。これまで経済制裁で民衆が政府に対し蜂起した例はなく、むしろ団結しがち。米国は軍事的圧力を強化するしかない——と以前から伺ったが、実際に米国は空母3隻を西太平洋に集結するなど、軍事的圧力強化に努めています。チキンゲームがこのまま進めば正面衝突になりますかね。

田岡…日本海の沖の方で日、米、韓の海軍やインド艦も加わった共同演習をしているのは、まだ「圧力」の段階だが、それで相手が核放棄に応じ、対話を求めて来なければ、もっと威嚇するしかない。領海近くに艦艇が迫ったり、そこで航空機が活動したり、有人、無人の偵察機が、



米国は空母3隻を西太平洋に派遣、軍事的圧力を強める（米海軍）

米国が他の国でしばしばやるように、領空に入つて写真撮影をすることも起こり得ましょう。それに對しもし北朝鮮が対空ミサイル、対艦ミサイルを公海やその上空の艦艇、航空機に発射すれば、初弾を撃つたのは北朝鮮だから、トランプ氏は「戦争を始めた」責任は免れます。

ただ、米統合参謀本部は「地下にある核兵器の所在を完全に把握できていない。完全に把握し破壊するには米地上部隊の投入が必要」

との見解を示しています。米軍が攻撃しても総てを一気に破壊できないから、相手は残つたミサイルを発射することになる。米国内では「最悪の場合、被災者は2500万人、うち米国人10万人」との見積もりも出ているから、トランプ氏も戦争をしたくはないのは確かでしょう。北朝鮮も戦争になれば滅亡は確実だから、自ら戦争を挑むとは考えにくい。北朝鮮は9月15日以降、弾道ミサイル発射をしておらず、「労働新聞」は10月28日の論評で「核戦力建設の目標は総て達成された」と述べているから、「これ以上はやらない」気配も示しています。

これまでも述べたが、米国でもテイラーソン国務長官、マティス国防長官らは「外交による解決」を訴え、同国の現実派の間では「核・ミサイル開発の凍結と国交樹立」を落しどころに對話するしかない、との論が出ています。米国にとっては本國を確実に狙えるICBMの開発さえやめさせれば一応成功だろうが、「凍結」は北朝鮮が日本などに届く核ミサイルを保有し続けることを意味し、「国交樹立」は金正恩氏の政権を米国が承認することになる

から、日本にとつては苦しい状況になります。トランプ氏と安倍氏が「圧力強化で核・ミサイル廃棄をさせる」と唱えた目標は達成されず、2人は右派からの激しい非難に晒さるでしょう。それでも戦争になり、日本でも何百万人もが死傷するよりはつとましではありますがね。

戦争になるか否かを考える際、私はビル・クリントン大統領がハワイ・トハウスの研修生モニカ・ルインスキー嬢と書庫で戯れ、弾劾された事件を思い出します。下院が訴追を決めたのは1998年12月19日だったが、その審議が進んでいた12月16日から19日にかけて、米軍はイラクのバグダッドなどに対し巡航ミサイル「トマホーク」325発以上とB52からの空中発射巡航ミサイル90発などによる猛烈な攻撃を行なった。「大量破壊兵器の査察に非協力的」との理由だったが、当時すでに査察は7年間も行なわれ、ほとんど終了しており、国連の承認を得ていない攻撃だったから、醜聞隠しの攻撃、と言われた。上院では弾劾賛成が3分の2に達せず無罪になりました。

トランプ氏の場合、側近のロシア

との癒着が次々と暴かれ、与党である共和党の主流派とは対立、政府の人事も進まず、閣僚からも馬鹿扱いされ、西欧諸国にも愛想尽かしされるといった苦境にあるだけに、一打逆転を狙つて武力行使の選択肢に手を伸ばしかねない状況にあることが懸念されます。米軍首脳部が極めて慎重であるのが救いで、「シベリアン・コントロール」とは軍人がシベリアンをコントロールして戦争をさせないことを指すのか、と苦笑してしまいます。（11月7日記）



果たして金正恩氏は日米の「圧力」に屈するのだろうか